北陸の縄文中期後半における外来系土器

小　島　俊　彰

1．はじめに

昭和59年12月2日,「越中と飛驒の縄文中期をめぐる諸問題」と題するシンポジウムが，富山市考古資料館で開かれた。戸田哲也氏（玉川大学講師）の基調講演は，岐阜県堂之上遺跡と同中野山越遺跡の遺構と遺物についてスライドを用いて行なわれ，飛驒北部と北陸の縄文中期における土器交流問題に示唆を与えるものであった。この土器交流問題が午後の討論の中心となり，活発な意見交換が行なわれた。しかし，研究者間の編年観の違いが討論のそこここに出てきて，いま一つ論議が嚙み合わなかった。

北陸の中期中葉から後葉の編年については，富山県水上谷遺跡や松原遺跡の資料整理からの細分案〔橋本1975〕や，金沢市古府遺跡や北塚遺跡の資料からの編年案〔南1981〕などが出されていて，それぞれが用いられてもいる。最近の私は，このどちらの細分案もとらずに，天神山・上山田様式という一語で扱っているが，論議の中で「小島の古串田新式の内容は不明確」との批判もあり，私自身も中期中葉の編年の細分と再考を行なわなければならないと感じたシンポジュームであった。

本稿は，この中期中葉の編年再考のための，基礎作業の一つである。中葉から後葉にかけて外来系の土器は，従前から北陸でもかなり見ることができて，富山県史の資料編を作った時もこのためのページを組んだりしていた〔小島1972〕。だが，それがどの地域の何様式に比定できるものなのかを，決定することはできないでいた。北陸の地域性の強さ，加曽利E様式や大木様式の本場からの遠さなどが障害になっていたのである。しかし近年は発掘による好資料が増加し，中には外来系のものと地元の土器が共伴出土したものも知られるようになってきている。

中葉から後葉にかけてのものを，刊行されている報告書などから抜き出し若干の考察を加えるが，従前からの問題点を解決できたということではない。外来系の土器を押え，北陸の編年を再考する一助にしたいというものである。

2．井戸尻III式・沖田II式土器

莇生遺跡の報告書で，第3群土器第1類Aとして纒めているものである〔西野1978〕。口縁部の資料だけであるが，外傾するもの，内屈するもの，外傾し端部が内傾するもの，の3変化がある。報告者の西野氏は，石川県下では類品が知られていないものだが岐阜県の萩原町沖田遺跡出土土器に極めて似ている，と記している。

西野氏が指摘する沖田遺跡の類似資料とは，沖田遺跡の一住居跡から出土して沖田II式と名づけられている内の，貼布隆帯により文様を構成している第1類をさしている。

沖田遺跡の報告書〔増子1974〕によれば，この第1類は，貼布隆帯に沿って櫛描線帯を伴う一群と櫛描線を欠く一群とがあり，前者は船元III式A類に比定され，後者は船元III式土器を模して作られたものだという。莇生遺跡の第3群土器第1類Aと類似するものは後者であるが，1点だが前者と似たもの（第1図5）が莇生遺跡にもある(第3群土器第1類B)。さて，興味深いことに沖田II式は，第1類と櫛形文のある井戸尻式を主体としているが，北陸の天神山・上山田様式（本稿では以後，天神山様式と略称する)も含んでいるのである。「天神山式土器が勝坂式後半に位置されることを証明した」と，報告者の増子氏は書いている。出土の天神山様式土器については，古府遺跡にも多く認められる天神山遺跡の中でも新しいグループに属するだろう，との考察も加えている。

沖田遺跡の住居址内出土の資料と同じような組み合わせが，高山市のツルネ遺跡の第4号住居址から発掘されている。この住居址の貼布隆帯は櫛描線を伴っているが，他の遺構からは，櫛描線の無いものも出土している〔高山考古学研究会1978〕

さて，莇生にもどろう。莇生第3群第1類Aの類例を北陸の中に求れない今，上記の沖田やツルネ遺跡の貼布隆帯文土器と結びつけるのは，当然のことであろう。莇生遺跡の報告書の記述によれば，上山田式と古府式がこの遺跡の主体である。隆帯文土器と結びつくのは，どれであろうか。古府式と並行するもの，と西野氏はしている。さらに今後の検討課題としながら，古府式新に置けるのではないかと，発掘の状況などを加味して述べている。

第1図1のような古府式に並行させることには筆者も異論はないが，その新しい部分（例えば第3図31）にということには，疑問を持たざるを得ない。西野氏自身も記しているように，沖田遺跡の北陸系土器は，古府式の古手であろう。より古くなる可能性はあっても，新しくはできないだろう。ツルネ遺跡の北陸系土器も，古府式新とはなりえない。

西野氏が古府式新と考えたのは,「大杉谷式に類縁を有する土器群」で大杉谷式の「古式」という予察が，大きく働いているのではないだろうか。古府式古では，中期後葉の大杉谷式とは，直接は結びつかなくなるから。また西野氏は，報告書204の土器を中富III式に類似すると考え，3群1類をも下すことにしたようである。204とは，同期としなければならないということはないであろうが。

莇生の203・204は，東海地方の咲畑様式に類するものであろう。富山県大沢野町布尻遺跡でも，1片出土している〔柳井1977〕。

話は飛ぶことになるが，沖田とツルネ遺跡の貼布隆帯文土器の図や写真をみた後に，久々野町堂之上遺跡の35号住居址出土土器の写真を同遺跡の報告書〔戸田1980〕で見た。そこには隆帯文で飾ったものがあって，これが沖田やツルネ遺跡のものと一脈通ずるように思えたのである。時期は同じく井戸尻III期という。この堂之上の土器は，長野県や山梨県で井戸尻IIIから曽利I式期の唐草文系土器と呼ばれるものの，仲間なのであろう。沖田遺跡の報告書の中で，隆帯に櫛描線の伴わないものは伊那谷の勝坂後半期と密接に関係する，と増子が書いていたのはこのことなのだろう。そうすると，莇生の隆帯文土器の流れ込みは，船元式に類似点があるから南からだと決めつけるわけには行かないようである。

再度飛ぶが，堂之上の隆帯文土器と器形や文様の似たものが，石川県宇ノ気町上山田貝塚から出土している(第1図6)。報告書〔高堀他1979〕で，第III様式の第49型式としたものである。文様は，隆帯にはよらず深い沈線で引かれ，頸部沈線内には押し引刺突文がある。この資料も，長野県地方の井戸尻III式と関連する土器と見てよいだろう。

3．火炎土器

火炎土器と，富山・石川県内に広がる天神山様式の類似は，よく指摘されるところである。S字の隆帯を核にして，器面全体を深い彫り込み文様で飾る雰囲気は，まさに兄弟というところである。富山県氷見市朝日貝塚出土のバスケット型土器は，くの字状に屈折した口縁部と屈折下部，そして胴部の3段に分けて文様を配している。これも，火炎土器の影響を強く受けてのことだと，私は考えている。

このように，火炎土器との繋がりが認められはするのに，火炎土器様式とみなすことができるものは，富山県東部に2例が知られるのみである。この少なさは，中期中葉の富山・石川県が新潟の上越あたりまで延びていた可能性があり，交錯はこの地帯で行なわれていたと考えてやることで理解できよう。

朝日町不動堂遺跡の第16号住居址覆土上層から出土した火炎土器(第2図17)は，新潟県糸魚川市長者ケ原遺跡出土のものと類似する。鶏頭冠把手が横長で低いこと，口縁部が同幅の2段に別れていること，口縁部の文様に半円モチーフが用いられていることなどが，根拠となる。

火炎土器を新古に分ければ，長者ケ原のそれは古式に属するという〔金子1981〕。大木８ａ式期に並行させることになるのであろう。

不動堂の第16号住居址覆土から火炎土器と一緒に出土したものの一部は，報告書に写真で示しておいた〔小島1980〕。その３は当地の土器で，天神山様式のもの。２も半隆起線文を持つので天神山様式風なのだが，注口状の突起がついていて，新潟からの影響が大きいものである（第２図18）。４の浅鉢が問題である。大木８ｂ式期の土器と私は考えたが，８ａ式期に上がらないものなのか。同遺跡の第18号住居址からはほぼ同期の加曽利Ｅ２式に属すると推定する深鉢（第１図８）が出土していて，これより古くは位置づけられるべきであろうが。

もう１個の火炎土器（第２図19）は，魚津市の大光寺遺跡から出土している。火炎式土器そのもので，新潟からの移入品と私には見えるのだが，本場のものとは違うと指摘する研究者もいる。口縁部や胴部のＳ字状文が，十分に表現されていないことも，違いの一つなのだろうか。ただし，この資料が火炎土器の中では新しいところに位置することは，不動堂の土器よりも鶏頭冠把手が高まっていることでもあり，誤りあるまい。

大光寺遺跡からは，天神山式から古串田新式までの天神山様式の全てが出土していて，その内のどの手の土器とこの火炎土器が共伴したかは，明らかではない。しかし，不動堂での位置づけや，火炎土器様式の中での位置づけからは，天神山様式の中頃（古府式）に並行させ，大木８ｂ式期に考えてよいだろう。

４．里木II式土器

里木様式の好例（第２図20）は，富山県立山町の二ツ塚遺跡から出土している。キャリパー器形の口縁部を低い隆帯で９区画し，この中に弧の浅い連弧文を撚糸文地に引いている。最上部には，細かいジグザグの彫り込みが巡ぐる。無文の頸部に続く胴上部には，３条の沈線を単位とした連弧文２段，撚糸文を地にして引かれている。『縄文土器大成　２』に，岡山県里木貝塚出土の里木II式の後半を代表する深鉢と並べて写真が掲載されていて，「里木II式にかなり忠実な作りである」と図版解説もされている〔橋本1981〕。

二ツ塚の資料以外に里木様式のものを報告書などで検索してみたが，意外に無いのである。わずかに３点，同様式になろうかと危ぶみつつ，引き出してみた。

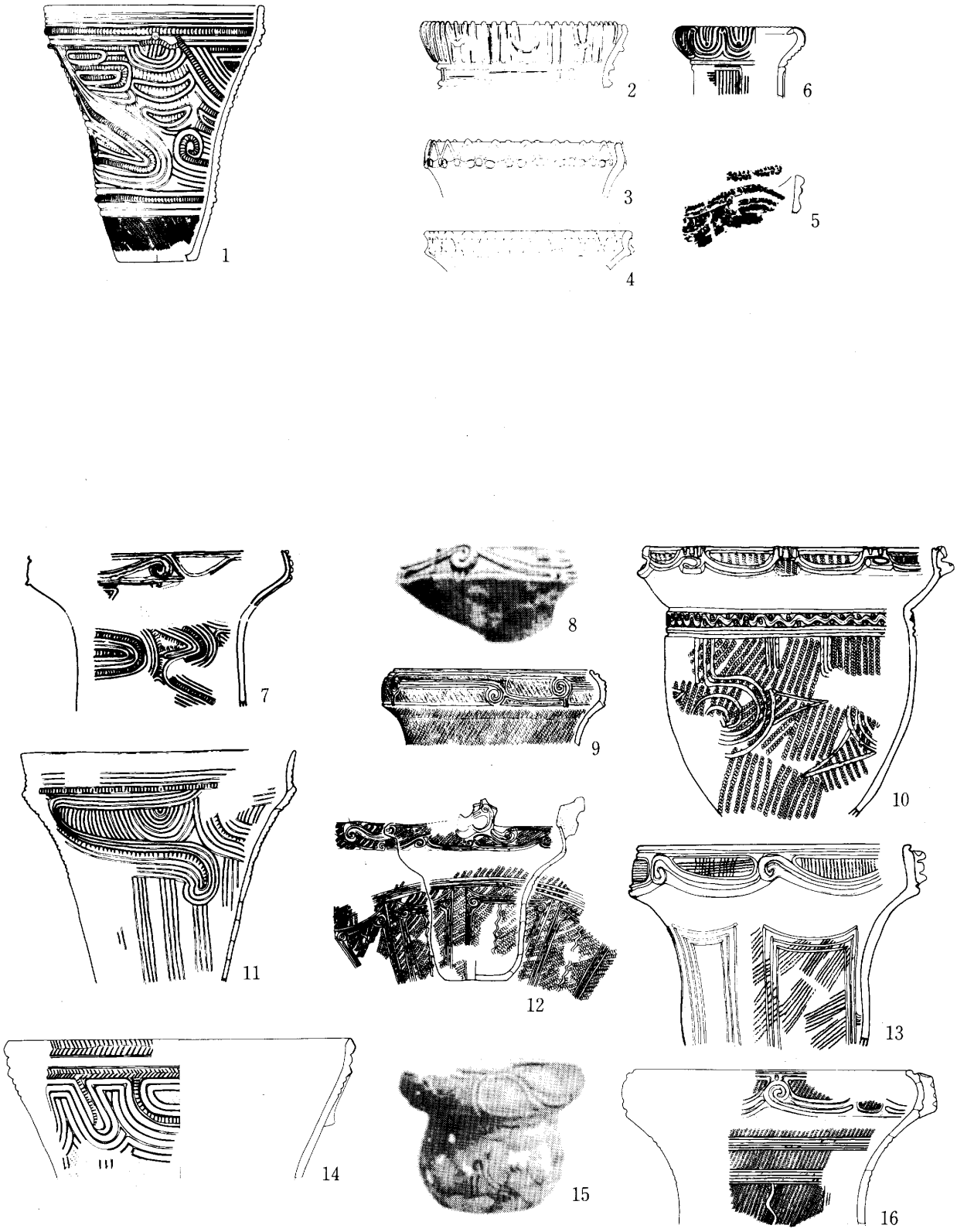
その１は石川県金沢市古府遺跡の発掘資料である（第２図21）。胴上部に二段の連弧文を巡らせ，頸部に一線を引きその上は無文としている。口縁部がないので決め手を欠くが，胴部の地文に撚糸文が用いられていることも，里木様式と見る根拠になる。文様は二ツ塚資料とは違い，北陸で盛んに使用される半截竹管で描かれている。ところが面白いことに，胴部の弧線文は一単位を２本の半隆起線で構成するが，間を空けて引いているのだ。地元の土器で半隆起線文が単本というのはジグザグ線にある程度で，複数本が間隔を置かずに引かれるのが基本だから，妙に見えてしまうのである。これも，里木様式に模したためと解釈しておきたい。

尾口村尾添遺跡の資料（第２図23）は，キャリパー形口縁の小片である。撚糸文地に半截竹管でジグザグ文などを引いている。

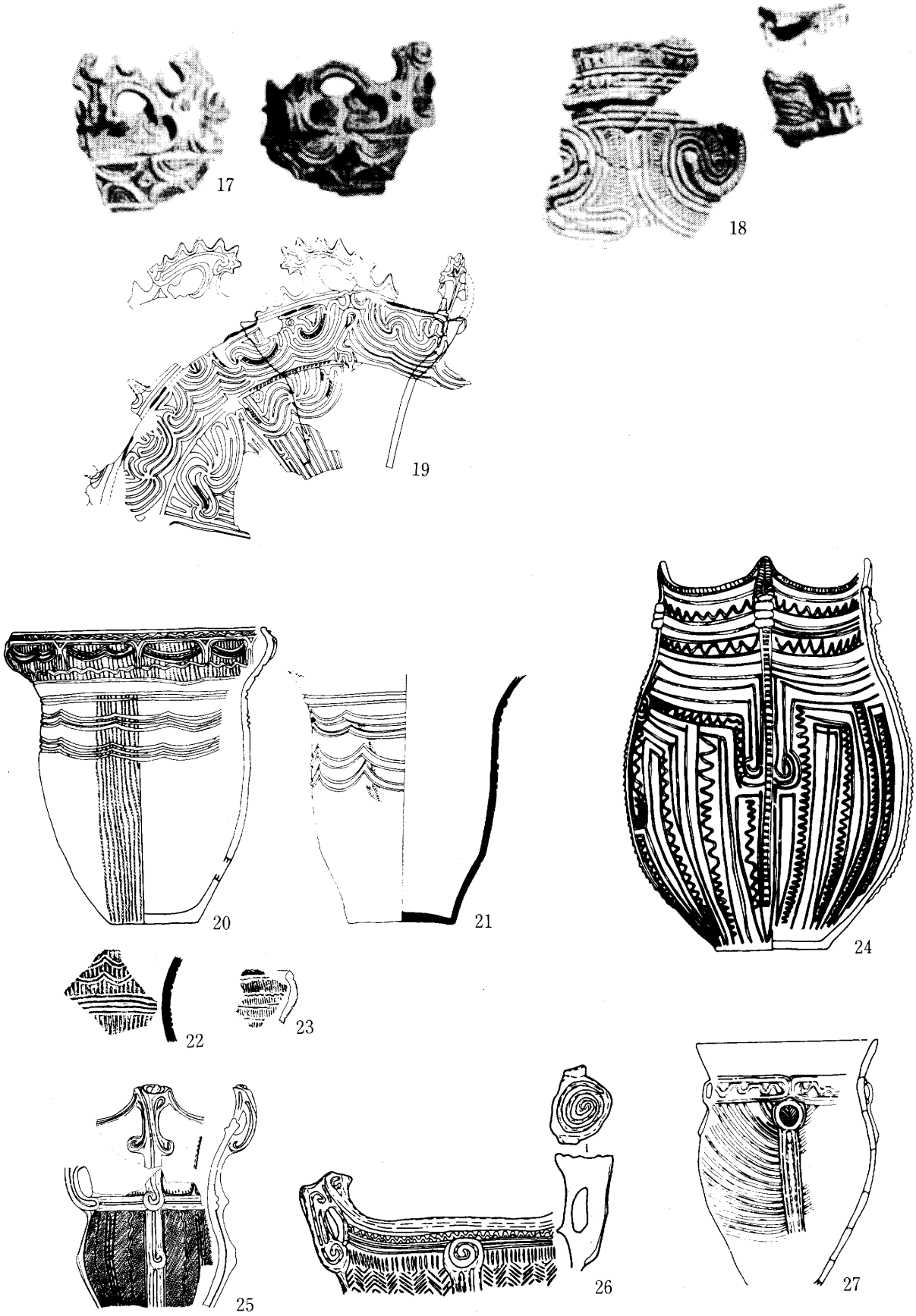
もう一点は，石川県鶴来町舟岡山遺跡Ｆ地点の資料（第２図22）である。撚糸文を地文としているように写真でも見て取れるが，この上に平行線と連弧文が二段，半截竹管で引かれている。頸部に無文帯が無いこと，キャリパー形になるのかどうかなど，里木II式に含めれるかどうか不確定なものだが，一応引き出しておいた。

里木II式土器が，北陸のどの様式と関わるかという問題については，二ツ塚の資料が解答してくれる。この土器は，報告書によれば第９号住居址から天神山様式と出土しているのである。橋本氏は古府式の中段階に伴うと述べている。

さらにうまいことに，この二ツ塚９号住居址からは，大木様式と関連をもつであろう深鉢土器（第１図10）が共伴していたのである。８ｂ式期に比定できようから，大木８ｂ―古府―里木IIの各式が，一線に並ぶことになるのである。



第１図　北陸の在地系土器(左)と外来系土器



第2図　北陸における外来系土器

第3図　北陸の在地系土器(左)と外来系土器

第4図　北陸における外来系土器

5．曽利式土器

第２図26は，富山県大沢野町布尻遺跡出土の資料である。２個の伸び上がった把手と渦文，細かいジグザグの彫り込み，縦位に引かれる綾杉文など，曽利II式土器である。

第２図25は，富山県の朝日町不動堂遺跡第18号住居址からの出土である。報告書の中で私は，「新潟県にその出自を求め，時期的には新潟中期第７期（森上第５期）に置きたい」と書いた。それにもかかわらず，曽利様式のこの項で扱うのは，この土器の把手や文様配置などに，布尻遺跡の土器との類似を強く感じ，曽利様式の流れも持つことを確認しておきたかったからである。ただし，曽利式そのものとは，できないだろうが。新潟県中期第７期土器は，曽利式の強い影響を受けているものだから，曽利式の雰囲気を持つことも当然なのではある。魚津市の石垣遺跡と早月上野遺跡にも，小片だがこの期の新潟風のものがある。

布尻の資料は岐阜経由の，不動堂のそれは新潟まわりと考えてやれば面白い。

二ツ塚遺跡に，曽利式との関係が云々されているものが，もう２個ある。

その１つは，第２図25の胴下半が張り出す深鉢で，第10号住居址から天神山様式中頃のものと出土したものである。器形といい，沈線で描かれた文様といい，北陸のものではない。橋本は，「曽利式の要素をもつ」ものと考えている〔橋本1981〕。

その２は，第２号住居址から天神山様式の中頃のものと出土した２図27の土器である。胴部に引かれる弧線や頸部のジグザグの彫り込みなどに，曽利式との繋がりを見てとれる。しかし，曽利式の本場の長野などでも，これと同型と認められるものはない。南は，この土器の頸部下にある隆帯で作られた円の中に葉脈状の文様があるのに注意して，北陸の中期後葉に盛んに用いられる葉脈状文の最古のものと，この土器を重視している〔南　1983〕。葉脈状文の出現を南より一期遅く考えている私は，この型式のものが他に見当たらず，後へ変遷も辿れないので，葉脈状文土器の始まりとは見ていない。

石川県押水町のホンデン遺跡の資料（第３図33）を，この項の最後に取り上げておく。断面図は，深鉢のように立ち上げて描かれているが，台付の鉢だろう。報告書の説明は，「貝殻擬縄文と三日月形の渦状隆線を使い，空間をヘラ状施文具で斜行にひっかき擬縄文で補足したりする」もので「串田新式との関係が深いことに注目したい」，とある〔嵯峨井他1970〕。この土器は，天神山様式の最新式である古串田新式に位置づけられる。私の目を引くのは，胴部のノ字状に下る隆帯である。この隆帯は２条からなり，沈線を添わせている。この期の地元の隆帯は１本で走るし，これを縁どるのは２ないし３条の半隆起線である。平面に引かれている斜行の沈線も，古串田新式には無い文様である。唐突でしかも計算高いが，この北陸にはなじまない要素を，曽利様式に求めれないかと考えている。曽利III式期の唐草文系土器の文様と類似するのではないか，というのである。天神山様式中頃（古府式）は先に見てきたようにほぼ曽利のII期におさまるから，丁度いい具合なのであるが。

6．大木式・加曽利Ｅ式土器

北陸の大木様式土器は，当然のことながら新潟を経由して入ってくるから，改変されたものが多くて，本場ものとの比較が難しい。また，加曽利Ｅ様式も，長野地方や東海地方から飛騨に入り富山へ，あるいは美濃から越前・加賀へと長駈して北陸に至る。長野から姫川ぞいに下る加曽利Ｅ様式の流れも考えられる。加曽利Ｅ様式はもともとは大木様式の影響で生まれた様式である。北陸では，その本家と分家の末流が行き当っているのである。このため，どちらの様式のどの時期なのか，その判断に私などは苦しむのであるが，発掘資料も増えているので，それらを中心にして紹介しておきたい。

第１図８は，富山県朝日町不動堂遺跡の第16号住居址覆土から出土した浅鉢である。先述のように，馬高式の火炎土器も伴出していた。報告書では，大木８ｂ式に関わるものと書いた〔小島1980〕。時期的にはこれでよいと思うが，加曽

利Ｅ２式との関係も無視できないと，今は考えている。

第１図16も同じく加曽利Ｅ２式との類似性が強いものである。不動堂遺跡18号住居址からの出土で，報告書では大木８ｂ式に比定していた。天神山様式の中頃のもの（第１図14）曽利II式の深鉢（第２図25）とが，伴出している。

第１図13は，富山県立山町二ツ塚遺跡からの出土である。地文には，撚糸文が転がされている。加曽利Ｅ２式に比定しておく。この土器は天神山様式中頃のもの（古府式）と共伴したようだ。

共伴関係ははっきりしないが，富山県魚津市大光寺遺跡からは，大木式とよく似たもの（第１図15）が出土している。口縁部には隆帯をうねらせて配し，胴部にも沈線文様を描く。撚糸文が地文となっている。大木８ｂ式に比定したいが，大木様式そのものではないという研究者もいる。第１図９の富山県庄川町松原遺跡の資料も，大木８ｂ式期のものと見ておこう。

第１図10は，二ツ塚遺跡第９号住居址からの出土である。加曽利Ｅ式期の位置づけができよう。大木８ｂ式に通ずるところが多いと，橋本氏は解説している〔橋本1981〕。胴部の沈線文様は，渦文と三角形を組み合わせているが，これなども大木式の雰囲気を感じさせるものだろう。この文様は曽利II式期の唐草文土器の胴部にもよく用いられていて，「加曽利Ｅ式から東北地方の大木８ｂ式に連絡する特殊な単位文である」という〔可児1977〕。二ツ塚のそれは横向になっているものである。

第１図13や16のような，キャリパー形の口縁部に沈線を添わせた２本の隆帯の配するものは，かなりの数を北陸でも見ることができるが，おおむね大木８ｂ・加曽利Ｅ式期のものと認めたい。そしてこれに伴う地元の土器は既に見たように，天神山様式中頃（古府式）である。

天神山様式の新期のものに伴うと思われるものに，第４図40がある。これも二ツ塚遺跡の発掘品で，古串田新式に極めて近いもの（第３図28）と，第18号住居址から出土している。この40は大木様式に類するものだが，８ｂ式期だろうか，９式期だろうか。石川県鶴来町舟岡山遺跡の資料（第４図41）の口縁端部文様も，大木様式８ｂから９式あたりのものだろう。この土器の口縁には，半截竹管によって波状の文様が引かれているが，この少し細か目の文様は天神山様式の新期のものに用いられる（例えば第３図31の胴部）。富山県城端町西山Ｂ遺跡の第４図43，石川県辰口町長滝Ｂ遺跡の44は，大木８ｂ・加曽利Ｅ２式期のキャリパー形口縁部であるが，胴部には縦位に走るコンパス文が引かれている。このコンパス文は，天神山様式新期の特徴的なものである。第３図32（石川県宇ノ気町上山田貝塚）の口縁上部は天神山様式新期の特徴を持つが，下部のノ字状に下る隆帯は２本組である。これは，前項の曽利式の所で記したように，北陸のものではない。

３波状口縁の第４図42は，まさに大木様式という感じのものである。８ｂ新か９式であろう。富山県魚津市大光寺遺跡の住居址から，天神山様式新期のものと出土している。

このように資料にあたっていると，天神山様式新期のものと，８ｂ式新から９式にかけての大木様式とが，重なり合うことは間違ないということになるだろう。浦山寺蔵の大木系の資料（第１図12）を古府II式期（この稿でいう天神山様式新にあたる）の図に南氏が組んでるのは，この計算では納得が行かない。

氏の同図６（莇生遺跡）と組むものは，石川県山中町国立病院遺跡の第３住居址出土資料（第４図45）などが相応しいと，私は考えている。この土器を福井県南条町上平吹遺跡の資料〔桜井1977〕と仲間とし，東海の取組式と結びつけられはしないかという考えは，図で示したことがある〔小島1983〕。

第４図50から52は，石川県金沢市北塚遺跡の昭和50年の発掘調査資料である。低い隆帯１条で文様を作っている。第４図53もそうだったが，キャリパー形口縁の湾曲度が弱い。同47も同じ金沢市の笠舞遺跡の資料である。これらは，加曽利Ｅ３式期に位置づけられよう。同一期だと証明するような共伴資料を持たないが，天神山様式最新期（古串田新式）に伴うものと考えて

いる。

加曽利Ｅ３・大木９式に結びつけれるような資料は，上記のようなものを石川県では示すことができたが，富山県は全く少ない。小矢部市埴生上野遺跡のものを，指摘できる程度である。前の加曽利Ｅ２・大木８ｂ式系のものは，約20遺跡50例を数えることのできた富山だったのに，大木８ａ式の関係とよく似た零に近い状態となっているのである。

７．おわりに

以前から，一度は扱わねばならないと思いながら見送ってきた外来系の土器を，今回興味の赴くままに集め，書き綴ってみた。集成も十分ではないし，それぞれの比定にも問題を含んでいるであろう。次回の天神山・上山田様式の細分を試みるときに，修整を期したい。なお，中期の終末期については，若干の図を載せながら説明を欠くが，これは先の拙文「串田新Ｉ式II式の編年観は逆転するか」と重複するので，割愛した。次頁に編年表を載せておく。

いつものことながら，今回も諸報告書から図を拝借している。末文ではありますが，御礼を申し上げます。

参考文献

石川県立大聖寺高等学校郷土研究部(1968)「江沼郡山中町国立山中病院遺跡調査報告」
小島　俊彰（1964）『高岡公園小竹藪縄文遺跡』高岡市教育委員会
小島　俊彰（1972）「縄文中期」『富山県史考古編』
小島　俊彰(1980)『富山県朝日町不動堂遺跡第３次発掘調査概報』朝日町教育委員会
小島　幸雄（1976）『富山市杉谷遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
酒井重洋他(1977)『富山県宇奈月町浦山寺蔵遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
嵯峨井　亮・村井　一郎（1969）「石川県押水町紺屋町ホンデン遺跡調査報告（第一次）」『石川考古学研究会々誌』第12号
桜井隆夫他（1977）『上平吹遺跡』福井県教育委員会
神保孝造他(1973)『富山県大門町串田新遺跡発掘調査概報』富山県教育委員会
高橋　修宏（1982）『富山県大門町串田新遺跡４』大門町教育委員会
高堀　勝喜・吉岡　康暢（1968）「石川県石川郡鶴来町白山上野住居址群第１・２次調査概報」『石川考古学研究会々誌』第11号
高堀　勝喜・四柳　嘉章他（1977）『赤浦遺跡』七尾市教育委員会
高堀　勝喜・平口　哲夫他（1979）『上山田貝塚』宇ノ気町教育委員会
富山県教育委員会(1974)『富山県庄川町松原遺跡試掘調査報告書』
西野　秀和（1978）『莇生遺跡』辰口町教育委員会
橋本　正他(1975)『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概要』庄川町教育委員会
橋本　正他(1978)『富山県立山町二ツ塚遺跡緊急発掘調査概報』富山県教育委員会
端野　英子（1979）『金沢市笠舞Ａ遺跡調査報告』石川県教育委員会
平田天秋他（1977）『尾口村尾添遺跡発掘調査報告』石川県教育委員会
南　久和他（1974）『金沢市古府遺跡』金沢市教育委員会
南　久和他（1977）『金沢市北塚遺跡』金沢市教育委員会
南　久和他（1981）『金沢市笠舞遺跡』金沢市教育委員会
南　久和(1983)「北陸の縄文時代中期後葉の編年観について」『石川考古学研究会々誌』第26号
宮田進一他（1982）『東中江遺跡』平村教育委員会
柳井　睦他(1976)『富山県立山町岩峅野遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
柳井　睦他(1977)『富山県大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要』大沢野町教育委員会
吉岡　康暢(1968)「鶴来町舟岡山遺跡Ｆ地点出土の中期縄文式土器」『石川考古学研究会々誌』第11号
山本　正敏（1982）「考古」『魚津市史史料編』

（本学助教授　考古学）

〔昭和59年12月20日受理〕

編年表

北陸（富山・石川）		東北	関東・信州		新潟	関西
天神山 上山田 様式	天神山 （古府 I） （古府 II） 古串田新	（大木 8 a）	（勝坂 3）	井戸尻 3	火炎	
			加 E 1	曽利 I	火炎	船元 III
		大木 8 b	加 E 2	曽利 II		里木 II
		大木 9 古	加 E 3	曽利 III		
串田新	串田新 I 串田新 II		加 E 4			

図版に使用した土器の出土地と文献

土器番号	遺跡名	文献
1～5	石川県辰口町・苅生	西野，1978
6	石川県宇ノ気町・上山田貝塚	高堀他，1979
7	富山県立山町・二ツ塚	橋本他，1978
8	富山県朝日町・不動堂	小島，1980
9	富山県庄川町・松原	橋本他，1974
10・11	富山県立山町・二ツ塚	橋本他，1978
12	富山県宇奈月町・浦山寺蔵	酒井他，1977
13	富山県立山町・二ツ塚	橋本他，1978
14	富山県朝日町・不動堂	小島，1980
15	富山県魚津市・大光寺	山本，1982
16～18	富山県朝日町・不動堂	小島，1980
19	富山県魚津市・大光寺	山本，1982
20	富山県立山町・二ツ塚	橋本他，1978
21	石川県金沢市・古府	南他，1974
22	石川県鶴来町・舟岡山F	吉岡，1968
23	石川県尾口村・尾添	平田他，1977
24	富山県立山町・二ツ塚	橋本他，1978
25	富山県朝日町・不動堂	小島，1980
26	富山県大沢野町・布尻	柳井他，1977
27～28	富山県立山町・二ツ塚	橋本他，1978
29	富山県平村・東中江	宮田他，1982
30	富山県立山町・二ツ塚	橋本他，1978
31	富山県金沢市・北塚	南 他，1977
32	石川県宇ノ気町・上山田貝塚	高堀他，1979
33	石川県押水町・ホンデン	嵯峨井他，1969
34	富山県魚津市・大光寺	山本，1982

土器番	遺跡名	文献
35	石川県辰口町・苅生	西野，1978
36・37	石川県金沢市・笠舞	南 他，1981
38・39	石川県金沢市・笠舞	端野，1979
40	富山県立山町・二ツ塚	橋本他，1978
41	石川県鶴来町・舟岡山F	吉岡，1968
42	富山県魚津市・大光寺	山本，1982
43	富山県城端町・西山B	神保，1976
44	石川県辰口町・長滝B	金沢大学考古学研究会，1976
45	石川県山中町・国立山中病院	石川県立大聖寺高等学校，1968
46	石川県金沢市・笠舞	南 他，1981
47～49	石川県金沢市・笠舞	端野，1979
50～52	石川県金沢市・北塚	南 他，1977
53	石川県金沢市・笠舞	南 他，1981
54	石川県鶴来町・舟岡山	吉岡，1968
55	富山県立山町・二ツ塚	橋本他，1978
56	富山県大門町・串田新	神保他，1973
57	富山県高岡市・小竹藪	小島，1964
58	富山県大沢野町・布尻	柳井他，1977
59	石川県金沢市・笠舞	南 他，1981
60	富山県高岡市・小竹藪	小島，1964
61	石川県金沢市・笠舞	端野，1979
62	石川県金沢市・北塚	南 他，1977
63	石川県鶴来町・白山上野	高堀他，1968
64	富山県大門町・田田新	高橋，1982
65	石川県七尾市・赤浦	高堀他，1977
66	石川県金沢市・笠舞	南 他，1981